

小学校高学年のバスケットボール単元における 「指導プログラム」を用いた運動有能感の向上 —ゲームパフォーマンスと運動有能感の関係に着目して—

森川美也 (群馬大学大学院)

1. 目的

本研究は、小学校6年生のバスケットボール単元を対象に、運動有能感を高める手立て(①教材の工夫、②豊かな仲間との関わり、③教師による働きかけ)を取り入れた「指導プログラム」を作成・適用することで、運動有能感が高まるかを明らかにすることを目的とした。また、運動有能感は技能と関係があると考えられることから、ゲームパフォーマンスと運動有能感の関係についても検討することとした。

2. 研究方法

- 1) 実施期間:2020年1月16日~2月10日
- 2) 対象者:G県F小学校の6年生(計84名)
- 3) 単元:バスケットボール単元(全8時間)
- 4) 調査方法:運動有能感調査(岡沢ら,1996)を単元前後に実施し、ゲームパフォーマンスを単元序盤(2~3時間目)と終盤(7~8時間目)を対象に分析した。また、ゲームパフォーマンスと運動有能感の関係を検討するために、ゲームパフォーマンスの伸び率と運動有能感の各因子の変化量の相関を解析した。なお、ここでは単元前の運動有能感調査を元に先行研究に倣って、上位群・下位群に分けて分析を行った。

3. 結果及び考察

1) 運動有能感の変容について

まず、クラス全体をみると「運動有能感合計」及び「統制感」が有意に向上し、「受容感」に有意傾向がみられた。その後、上位群・下位群に分けて分析した結果、全ての因子における上位群は高い値を維持し、下位群は有意に向上した。このことから本研究で作成・適用した「指導プログラム」を適用することによって、上位児の運動有能感を維持し、下位群の運動有能感を向上させることができるといえる。

2) ゲームパフォーマンスの変容について

ゲームパフォーマンスは、クラス全体及び上位群・下位群いずれも有意な向上がみられた。したがって児童はゲーム状況を適切に判断できるようになったといえる。

3) ゲームパフォーマンスと運動有能感の関係について

ゲームパフォーマンスと運動有能感の各因子における相関を分析した結果、下位群の「統制感」とゲームパフォーマンスとの間のみ有意な正の相関がみられた。これにより「統制感」を高めるためにはゲームパフォーマンスを高める必要があるといえる。しかし、本研究は1単元だけであったことから、「運動全般」に対する自信を身に付けることができず、このことが「身体的有能さの認知」とゲームパフォーマンスとの間に相関がみられなかった理由であると考えられる。したがって、複数の単元でこのような取り組みが求められているといえる。「受容感」はゲームパフォーマンスと関係がないことが明らかとなった。

4. 結論

以上により、本研究で取り入れた「指導プログラム」は上位群の運動有能感を維持し、下位群の運動有能感を高めるために有効であると結論づける。また、「統制感」を高めるためにはゲームパフォーマンスを高める必要があることが明らかとなった。今後は、複数の単元を対象に「指導プログラム」を適用した授業を実施していきたい。

5. 主な引用参考文献

- 1) 友添秀則(2015) 学校体育活動における指導の在り方調査研究—体育科、保健体育科の授業における運動が苦手、嫌いな傾向の児童生徒の関心・意欲を高め、運動習慣の確立につながる指導の在り方—。体育授業における課題対策推進事業研究成果報告書, 1-7.